

入選

『朴おじさんとの思い出』

鴨川次郎

まだ小学生にならない幼い頃、我が家に夕暮れになるときまってやってくるおじさんがいた。朴さんというおじさんは口数も少なく、いつも静かに笑っている人だった。いつも汚れた作業着に商売道具のコテなどが入った左官の道具を肩にかけてやってくる。当時、大家族だった我が家にも自然に溶けこんで、とりわけ学校の同級生だった父とは仲が良く、日本酒を酌み交わしては夕飯の団欒に加わっていた。

幼い私には朴おじさんの左官屋さんという仕事がどういうものかはわからない。ただ、傍らに置かれた左官道具が物珍しく、おじさんに「これは何に使うの」とよく聞いた。そんな時は日頃物静かなおじさんがうれしそうに一つ一つ丁寧に教えてくれ、コテなどに触らせてくれた。お酒が入ってくるとおじさんは日本語とは違う私の知らない言葉で歌を歌った。それが朴おじさんの故郷珍島のアリランだと知ったのは私が大人になってからのことである。いつの間にかおじさんは家族と同じ存在となり、我が家の食卓になくてはならない人となった。

おじさんと父は昭和10年生まれ。終戦後の混乱と貧しさの中を生き抜いてきた世代だ。貧困の中を共に励まし合いながら歩いてきた仲間ゆえ、同志のような強い絆があった。父自身も早くに祖父が倒れ、中学も家業の手伝いのため、満足に通えない日々だった。お昼の弁当も持っていけない日は、昼休みの間中校庭の水道の水で腹を満たし、教室の友が昼食を済ませるまでポプラの木の下で寝っ転がり、空を眺めていたという。ただ、そんな父が卑屈にならずに済んだのは傍らに同じような境遇の朴おじさんがいたからだった。おじさん自身は在日二世で、当時の日本の差別、偏見に痛めつけられながら歯を食いしばって生きる子供だった。自然、二人の間には固い友情が芽生えた。時に朴おじさんがお母さん手作りの真っ赤な朝鮮漬けを家から持ってきて、父に分けてくれたという。その味は父にとっては優しさそのものであり、二人をつなぐ特別な食べ物となった。

その後二人は中学を卒業し、父は家業の運送業を継ぎ、朴おじさんは左官屋さんの小僧となった。その後、互いの環境は変われど共に朝鮮漬けを分け合った頃の絆は変わらず、いつしかおじさんは我々一家の「家族」といってよい人となった。余計なことも言わず、お酒を飲んでもニコニコと笑顔のままのおじさんは我が家の食卓を和やかにしてくれる人でもあった。

今でも鮮烈に覚えているのは日曜日の草朝に珍しく朴おじさんが我が家へやってきた日のことである。何でも急に左官の仕事が入ったらしく、うちの祖母に弁当を作ってもらったためだった。その日に限って私は早起きで、おじさんの仕事についていきたいとせがんだ。おじさんは二つ返事で許してくれ、自転車のおじさんの背中にしがみついて仕事現場に連れていってもらった。その場所はちょうど新築の家を普請している最中で、大勢のたくましい大工さんや人夫さんらでごったがえしていた。

朴おじさんは私を自転車から降ろすと、左官道具を取り出し、ゆっくりと平べったい器の中でセメントのようなものを水と混ぜ合わせ、ゆっくりとこね始めた。その時のおじさんの目はふだん我が家で見せる柔和な目ではなく、真剣で強い目だった。やがて、こね上がったものをコテにひょいとすくって家の壁に塗っていく。おじさんの動かす手は規則的で、見る見るうちに殺風景だった壁が変身していく。その手さばきが幼い私には「魔法」そのもので夢中で眺め続けた。かなりの時間をかけて仕上げた外壁はどこも同じ色、同じ厚さで美しかった。「すごいなあ」。その日から朴おじさんは私にとって身近なおじさんから尊敬できるおじさんへと変わった。

その後もおじさんは変わることなく、夕方になると我が家へやってきた。時に朝鮮漬けを手土産にし、それを肴に父と晩酌を楽しむ。それは私に友達って素晴らしいものだということを教えてくれる夕暮れの光景でもあった。一時、おじさんのように自由自在に壁を塗れる左官職人になりたいと思ったのもちょうどこの頃である。

あれから50年。今の私はあの頃の二人の齢を大きく越えている。おじさんはその後病気のために左官の仕事が続けられなくなり、遠くへ引っ越していった。一方の父もまた先年脳梗塞に倒れ、長年握ってきたトラックのハンドルも持てない身となった。残念ながら、朴おじさんは転居を繰り返したらしく、その消息はわからない。しかし、今でも近所で工事現場を通りかかると、ついつい外壁に目がいってしまう。時に左官屋さんの姿を見つけると、あの頃の朴おじさんと重なり合っただけに見える。そんな時の私の心は子供に還っている。